

## 6. 肝臓の多発性神経節細胞腫 (Multiple ganglioneuroma in liver)

誌名	鶏病研究会報
ISSN	0285709X
著者名	大迫,英夫
発行元	
巻/号	37巻4号
掲載ページ	p. 243
発行年月	2001年2月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター  
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council  
Secretariat



## 鶏病カラーシリーズ

### 6. 肝臓の多発性神経節細胞腫 (Multiple ganglioneuroma in liver)

キーワード： 神経節細胞腫，類円形細胞，肝臓

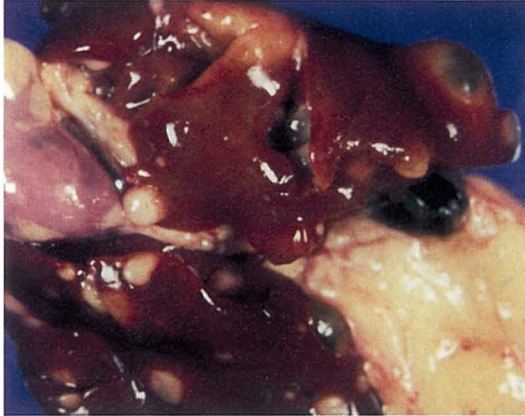


写真 1. 肝臓に白色腫瘍が多発し，一部に透明液を入れるのう胞を形成

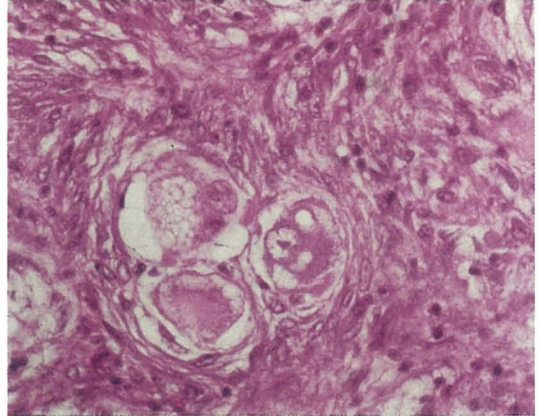


写真 2. 腫瘍細胞は類円形で，細胞質が好酸性で，泡沫状。細網線維に内包されている。

動物：ブロイラー

発生状況および症状：生体検査時には異常は認めなかった。

肉眼所見：肝臓に米粒大～小指頭大の白色で表面から隆起した腫瘍が多発していた。肝実質内部にも認め，一部は嚢胞を形成し，無色透明液が貯留していた（写真1）。正常部位との境界は明瞭だった。肺にも弾力性のある肝臓と同様の腫瘍を認めた。

組織所見：腫瘍細胞は神経節細胞様で，核が偏在性で膨脹しており，細胞質が弱好酸性で泡沫状の類円形細胞で，細網線維に囲まれていた。一部に spider cell 様の腫瘍細胞が観察された。腫瘍細胞の核分裂像は認めなかった。腫瘍細胞の密度は疎で，著しい膠原線維の増殖が著明であった（写真2）。病変部境界には多くの偽好酸球，偽胆管の増生，リンパ球の集簇を認めた。肺にも同様の病変を認めた。腫瘍細胞は一部 PAS 陽性，s-100 タンパク，ケラチン，ビメンチン，デスミンによる免疫染色は全て陰性だった。

解説：腫瘍細胞の形態的特徴から，表記の診断名にした。肺と肝臓の腫瘍の関連性については肝臓からの転移

の可能性があるが，腫瘍細胞の細胞異型が乏しかったことから悪性度は低いので，多発性に発生したと判断した。